

書評

村松剛『西欧との対決』（新潮社）

—著者への追悼を兼ねて—

和田正美*

これから取上げる本には一寸した因縁がある。我が國では小説家や詩人だけでなく、批評家もよく論じられるといふのに、村松剛論が現れないのは、不當なことだと考へてゐた私は、それならいつそのこと自らそれを書かうと思つて、さうするための手掛りを作るべく、たまたま新聞廣告で見掛けた村松の近著『西欧との対決』を取寄せたが、それを入手したその日に、私がこの本を持ち歩いてゐるのを目に留めた某氏から、著者の訃を聞かされたのだつた。村松氏の告別式は六月四日に青山葬儀所で行はれたが、私はその式場に赴く電車の中でも、これを開けた。やがて同氏未亡人の順子さんから私家版『西欧との対決』が送られて来た。以上のやうな経緯から、私にとつてこれは、まことに忘れ難い本である。

『西欧との対決』は著者の近業及び少し古い文章を集めた評論集、隨想集であり、帯封にある、「避けがたいヨーロッパの影のなから

独自の非西欧的世界を開いた文学者の系譜を追う」といふ謳ひ文句には必ずしもそぐはない。内容的に見ても、村松剛の作物としては第一級のそれが収められてゐると思へないが、それでも、そこから、著者の精神の軌跡が浮び上つて來ることは事實である。以下に多少の不満を交へながら書評を試みることにする。不満、と書いたが、それを表明することは死者への冒瀆にはならないであらう。むしろ、拙文の讀者が村松の志を見直すすがにそれがなれば、といふやうな願ひを籠めて書くつもりである。

この本に収録された作家論もしくは隨想的作家論を一瞥すると、そこで取上げられた人々の中には（取敢へず話を同時代人に限定すれば）著者村松剛の知人、友人が思ひの外多いことに氣付かされる。小林秀雄、川端康成、三島由紀夫のやうな先輩と遠藤周作、北杜夫、開高健、立原正秋また（これは獨立した論ではないが）服部達といふが如き文學上の友人がそれぞれ、その人物像と共に論じられてゐるのであり、村松のこのやり方を批評すれば、私達はそこから、知己である作家を論じることに伴ふ強みまたは弱みといふ一の文學的課題を引き出すことが出来るやうに思はれる。

右に名を擧げた遠藤以下の友人について言へば、彼等の人物像を描く手腕はなかなかのものであり、彼等の作品についても、それとの關係で一應の所納得の行く説明が與へられてゐるのであるが、しかし、友情とそれに基づく配慮が作家論、作品論の足を何がしか引つぱつてゐると言へはしないか。

たとへば遠藤周作の項では、遠藤におけるキリストがヨーロッパ人の場合とは違つて、父ではなく母のイメージに重なり合ふことを著者

は遠藤の母親體驗を引合ひに出しながら、縷々と説いてゐるが、村松自身は（キリスト教の理解者でありながら、或はそれ故にこそ）反キリスト教的感性の持主の筈であり、そのことが何等かの形で生かされてゐてもよかつたと思ふ。

無宗教献花式で行はれた村松氏の葬儀で、誰かが、「生前の村松先生は自分の葬儀がキリスト教で行はれることは村松剛の人格を侮辱するものだと言つた」といふ意味のことを述べてゐた。

三島由紀夫論になると、ことはもつと重大である。「三島の死と川端康成」は三島論といふよりも、三島晩年の姿を川端との對比において描かうとしたものであるが、それを讀むと、おそらく著者の意圖に反して、三島由紀夫のみならず川端康成や平岡梓（三島の父君）の人間の弱點が私達の前に姿を現はす。村松がここで書いた通りであるとすれば、彼等は三人とも子供っぽい人達だつたと言はざるを得ない。かういふ文は身近かな人でなければ絶対に書けず、讀み物としてはたしかに面白いのであるが、そこにはどれほどの文學的價值が含まれてゐるのだらうか。

人間は誰しもぎりぎりの所では子供っぽいものだ、といふ確信がこの文を支へてゐるのなら話は別であるが、多分さうではないであらう。

他の三篇の三島論は三島に對する村松の行き届いた理解を物語つてゐるものではあるが、以前に同じ著者の『三島由紀夫の世界』を讀んだ時にも感じたことであるけれど、村松の三島理解はその重心が三島讚美に傾き過ぎてゐるやうに思ふ。村松ほどの讀者量を以てすれば、『三島由紀夫の世界』に文學全体の光をもつと當てて、それを客觀視

することが出来ただらうにといふ氣がする。

思ふにこれは村松が生身の三島を知り過ぎてゐたからであらう。村松剛論の著者はこの批評家に三島由紀夫が落してゐる影を見落すべきではない。村松にとつてその影は望外の幸せであると同時に、息苦しさとうつたうしきをも味はせるものであつたらう。

しかし著者は三島にどれほど親炙しても、彼に屈従することからは免れてゐる。それを可能ならしめたのは小林秀雄の存在だつたらうと思はれる。村松は「わが文學的青春」の中で、二十五歳の頃の自分を顧みて、當時の自分は、「同人雜誌に小林秀雄論と三島由紀夫論とを書いたのが、唯一の文學的閱歷（？）だつた」と記してゐるが、このやうに小林と三島を同時に強く意識しながら批評家として出發したことは、明らかに村松の精神を健康な状態に保つた。いふまでもなくそれは小林と三島が全く異なるタイプの文學者だつたからである。

追悼文である「小林秀雄——『無垢』の思想家」は、論の對象の小林との個人的なつきあひがほどほどであることも手傳つてか、からりとした、いい文章である。ここに見られる小林讚美は三島讚美の場合のやうな抵抗感を抱かせない。著者はこの文の締括りとして、「『小林』氏を論じた評論は多い。だが國際的な精神史の視野のなかで氏の仕事を考えた論文はひとつもなく、まだ当分はあらわれないのではなにか」と述べてゐるが、村松は「國際的な精神史の視野」を念頭に置くことが出来た人であり、思ふに、そのやうな「論文」の書き手としては彼が最もふさはしかつたのではないだらうか。しかし私の希望が實現する機會は、村松氏の死によつて、永久に失はれてしまつた。

ここまで書き進めて来て或ることに気付いた。小林秀雄も三島由紀夫も言葉にやかましく、執筆に際しては歴史的假名づかひを押し通したが、村松剛にも、それと同じ意識が頷ち持たれてゐたやうに思はれる。今、手元に資料がないので、正確な引用は出来ないが、村松は或る論文の中で國語における正統表記の復活を強く訴へてゐた。が、それでゐて、『西欧との対決』は現代假名づかひで書いてある。村松は（少なくとも假名づかひの面では）その主張或は氣持を實踐に移すには至らなかつたといふことであらうか。

告別式場で某氏が、「村松さんは今頃天國で赤ワインでも飲んでゐるのではないか」と言つた時、私の隣に腰掛けてゐた共立女子大學の太田和子助教授が、「村松先生は決してワインとは言はず、いつも葡萄酒とおつしやつてゐた」と呟いたのが強く印象に残つた。

先に著者の小林秀雄論の結びの一文の中に見られる「國際的な精神史の視野」といふ表現を取上げたが、これをもつと簡潔な「國際的視野」に變へれば、私の中で、村松剛といふ批評家に絶えず結びついてゐた名稱は正しくそれだつた。實際、村松は物事を國際的視野から考察することが出来る所の、數少ない知識人の一人だつたやうに見える。何もそれは村松がフランス文學を初めとする西歐文學に詳しくかつたことだけを意味するのではない。彼は古代オリエント以來の世界史に關する知識を背景にして、或は國家の、或は國際社會の在り方を半ば直觀的に把握してゐた人である。そこから五十年來の日本に著しい觀念論的平和主義への批判と攻撃が生れた。

村松剛の、右に記したやうな側面は、日本の言論界の受入れる所には必ずしもならなかつた。村松が餘り論じられなかつた理由の少なく

とも一つはそのことであつたとしか思へない。村松は日本といふ島國の平均的感性を擻んでゐただけに、かへつて疎まれたのであらう。その意味で彼は不幸な文學者であり、思想家であつたと言へるかも知れない。

しかし村松はその代償であるかの如く、外國に數多の知己を持つてゐたのではなかつただらうか。告別式には駐日イスラエル大使が參列してゐたし、入江隆則氏によつて讀み上げられた弔電の中には、中華民國の李登輝總統、イスラエルの副首相、南アフリカ共和國の政府要人の名があつた。（公平を期するために書いておくと福田糾夫氏の名もあつた。）

日本の文學者の中に、外國の指導的政治家からこれほどの弔意を示された人がかつてあつただらうか。表層的なジャーナリズムの外側で評價され、尊敬されてゐたこの人を「不幸」と決めつけるのは速斷といふものであるのかも知れない。

とはいへ、私は問題をここで終らせようとは思はない。『西欧との対決』の著者は言ふまでもなく文學者であり、彼は記紀以來の日本文學の傳統に通曉してゐたのである。「詩の榮光」の中の一節である、「古代の日本人は、白装束に杖をひいて、山に死者の魂をたずねた」は少しも獨創的な指摘ではないが、それにしても、かういふ文が必要に應じてさりと書けることは明らかに何かを物語つてゐる。文學者としての村松剛は何よりも先に、千數百年來の日本文學の流れに身を涵してゐたと考へられよう。

記紀、萬葉に始まる日本文學がそれによつて培はれた感性はおそらく當代の、國際社會の常識に盲ひた觀念論的平和主義に通底してゐ

る。多くの文學者或は知識人が平和憲法といふムードに酔ひたがるのは、敢へて彼等に好意的な言ひ方をすれば、彼等が祖先より受け継いだ感性がその中で安全に守られるからに他なるまい。とすれば、そのムードを拒絶する村松の中には、二つの容易に相容れない極が存在してゐたことにならないであらうか。

私がかねがね村松剛に期待してゐたのはそれらの極を統合することだつた。それが首尾よく行はれた暁には未聞のドラマが幕を開けるだらうと考へてゐた。しかし私が夢を託した相手はもうゐない。

村松は未成の人だつたと思ふ。このことにおいて六十五歳といふ享年は何の意味をも持たない。

この高貴な精神の持主は私達に或る大きな課題を残して、永遠の彼方に旅立つたのである。

告別式の歸りに青山通りを歩いてゐた時、横町から長身の村松氏がひよいと出て来るやうな錯覺に何度か襲はれた。